

事相と事法門

中 澤 要 實

一、求道への悩み

棲神編輯者へ毎年駄稿を送つて紙上の一片を汚さして頂く光榮を得てゐる。然し學窓を巢立ちて以來何等學究的なものを物する事は出来ない、それは一に私の不勉強によるものであらうが、かく至るに一の原因があるのだ。

それは第一に環境の支配である。教義を學問の爲に學問するのであつたら寺門經營が成立しない。結局は教壇生活者に與へられた特權の如くに考へられる。寺門經營の能梵者は法要佛事に遂はれて省みる暇が尠い。貧梵なるものは法要佛事の少きを悲しみて農商の業までも遂はんとしてゐる。自己のよりよき生への愛著は人間の個人的本能であるかも知れないが「僧もやはり俗なり」嗚呼大道すたれて何處へか行く。これ誰が罪ぞや、その原因の

一たる私已前にも該紙上（棲神二十三號）にも、のべたが所謂教團の組織的統制がなつておらぬ事に起因するのだ。かゝる現在の教團制下に於ける私の悩みの解決への道は師壇の契りを何處までも不可分離たらしめる信念的結合を深める方法を主眼として勉強してゐるつもりである。寺門の因襲的結合の薄きつゝある現在である。この悩みの解決を求むるべく敢て同窓の畏友に紙上を以て、うつたへんとするものである。二三年前専任布教師の名目を與へられた私が眞實に衆生を救ふ言説であると思ふて力強く布教した事は尠い。自己の不辯舌と信念力の薄さが常に臆病にしてゐる。たと漫談的、講談的、落語的に語る説教の一節に感情を支配せしめて幾分でも説教的好果があつたが如く感じて微笑することがあつた位だ

其處で更に考へた事は眞の信仰は自己の體驗による法悦を語ることだと感じた私は、先ず體驗的信念養成の爲に正中山百日間の寒水白粥の荒行に加つた。精神的に體質的に劣者たる私はニツチエにでも會つたなら屠殺場送りにでもなつて、出直してこいと云はれたかも知れないが強く慈悲にあふれた尊神様は信仰の生命の體驗として生きて在したるが御蔭にて更賜壽命せられて無事成滿する事が出来たのだつた。體質的に弱き自己ではあつたが精神的により強く生くる宗教的安心を得たやうな氣がある。たゞこの境地は信得すべし、識得すべからずの所産ではなからうか。と云つて覺者になり得た譯でもない。たゞ日蓮上人の宗教の偉大性が如何に日蓮教學として綻りであり、人間生活の上に指導的役割が如何に力強く上下機に及ぼされてゐるかを知つたのである。其處で更に日蓮上人を信仰的眼によつて見直さうと痛感したまでである。

二、宗教と宗教人

事相と事法門

宗教に對する批難を聞く事がある。即ち人間生活には有害無用の存在の如く思ふものさへある。以前「宗教は阿片なり」と宗教的効用を指して論斷したものさへあつた位であるが、今回の支那事變下に於ける國民精神總動員、舉國一致の精神は敬神崇佛を以つて國民精神團結の大役割を演ずるに至つたので、さながら旭日に霜のとくゝるが如く薄らいで來たやうである。これは人間生活に於て困危の場合に遭遇せる時に起る宗教への必然的欲求である。此處に如何に理性的な科學心酔者でも割り切る事の出来ない人間的弱さがあるのだ。昔から「人、病を得て道心を生ず」と云ふてゐるが人間の精神的生活は理性的生活を越えて要求せらるゝ崇高偉大なる所産である。されども人間生活の三要素はと云へば衣食住であつてどうしても物質が全面的役割を演じておるので精神問題は等閑視しても、よいやうに考へられる。此處に宗教生活が無用視さるゝ所以が存在するのである。殊に宗教人に親近すれば布施、燈明料の供養行爲が重なる譯で資産

建設の敵であるかの如く考へる。故に宗教心は必要でも宗教人は嫌惡するものがある。ある理性者が門下の篤信の人を貶して曰く「君は賽錢の浪費者なり」と完全なる人間生活は智情意の三の圓滿具足による事を知らざる輩の聖なるものを信じ得ざる哀れな言である。孔子に「衣食たりて禮節を知る」と云ふ言葉があるが物質慾が先ず第一であるのが色体を有する人間慾の必然であらう。なれども精神慾は更に物質慾の支配階級として存在するのである。殊に今日の社會は家族制なものが集合して一村一町一市をなし國家をなしてゐる所の集合体である。故に精神的生活のつながりなくして生きて行かれない。道徳あり、宗教ありする所以である。殊に人間をそのまゝにしておいたなら弱肉強食は必然の原理である。人間相互の制約位だけでは到底人間全部が良心的に生きて行かうとしない。此處に人間已上の「何物か」を要求するに至るのである。この要求を完備化したのが宗教であると見るのであるが、と云ふて人間生活上の必要的所産であ

ると云ふのではない。この人間的弱さが久遠の生命と大慈悲を體現するやうになつたのである。この慈悲顯現の本佛を體現するには相當の修養を用する。この慈悲願海に入らしめる役を演ずるのが宗教家である。生活線上の弱き人間を強く生かしめるのが宗教人の責務である。がこの点、加持祈禱の宗教的行爲をさして弱身につけ入る風邪神と同様に見らるゝ所に世人の誤解が生じるのである。世人は一概に宗教と云ふが宗教の本質ではない。宗教人とを混濁して考へてゐるやうである。何がかくも認識不足にせよ、宗教人を批難するやうになつたか。それは宗教的本質と宗教的人格の不一致から來るものであらうと思ふ。宗教人は須らく宗教的本質の體現としての宗教的人格者でありたいと思ふ。なれども過去幾星霜を経たる教團の歴史的發展事實の下にある現状たる所謂既成教團下にあつて宗教人の人格に如何なる革命期を興ふべきかを敢て諸賢に御教導願ふ次第である。

三、宗教家と宗教心

一體、宗教家は宗教心を持つてゐるのであらうか。昔からの惡口に「坊主の不信心」と眞實でありたくない。衣食住の爲に宗教的行爲をなしつゝあるのではなからうかと假念が正當論たらしめたくない。少くとも宗教心を生命とするが爲に、生産的事業が出来得ざるが故に衣食住を要求するのだ位の程度でありたいと思ふ。無意に因襲的傳統の餘德に馴らされて生活してゐるものがあるのではなからうか。もつと宗教の本質を知ると同時に宗教的人格を身と心に具備してこそ眞の宗教家が生れるものであると思ふ。學者は學の爲に學問するのみ、研究の爲に研究するのみ、その奥底にあつて偉大なる根源的役目を演じてゐるのであるかも知れないが、又寺門經營者はよりよき私財の蓄積を考へる宗教的行爲多く、信仰の爲にする宗教的行爲は少く、衆生救済は第二義的ではないのである。寺門の家族制が家族扶養に苦しむ宗教人の哀れな結果である。檀家の宗教的行爲に對しての觀念は社會の實際的儀禮位に考へて、寺への布施は少くしても

親戚知己への御馳走を多くして報恩供養を儀禮化して信仰化して行かなくなりつゝある現今の狀態である、故に宗教家は宗教的儀禮の執行者、請負師位のやうに考へるものさへあるのは悲しき事實である。本佛の前に絶對的信仰を持ち、師檀の契りに隨喜するものは、日を遂ふて減少しつゝある狀況は、宗教が人間生活に差程に必要でない爲であらうか。信仰が宗教家になきためか。社會人の思想的惡化が無信仰たらしめたのか。私は宗教家の宗教心に薄きことゝ同時に現代思潮の惡影響によるものと思ふ。吾等宗教家は敢然として、この惡思想に打ち勝つて善導して行くだけの闘士的教養を持つてゐねばならぬと思ふ。かゝる眞剣なる眞面目さが缺けがちであつたのではなからうか。

四、宗教家の行方

おゝ宗教家よ！ もつと自己の本分に目覺めやう。進んで異体同心的行動を共にして行かう。徒らなる私利私闘することはやめよ。偉大なる宗祖の人格の前に給仕奉

公する赤子たるの自覺を持ち、師檀共に祖廟に燈明を供へるの覺悟を持ち、その祈る誓ひは興亞の大法燈なりの大法西漸を壽ぎ祈る清淨なる心と姿でありたい。かゝる信仰の組織統制は實に貴くも崇高なる實行運動であるがその畫するものゝ心が政治的精神の所産であつたなら其處に何か空虚なものが身に感ずる。なれども依法不依人の考ふれば不平もあるまい。現代人心の求法的精神にかけつゝある事は前述の如くなれば、依法する前には必ず依人が第一條件である。先ず宗教的人格の完備が必要である。現代人は生活の不安が如何にしてのぞかれるか。其處には精神的に物質的に不安除去の要求は千差である此處に法の運用法があるのだと思ふ。即ち社會人心の惱める思想生活の底をついて導くだけの教義の力を具体的に平易に生かして布教せねばならぬと思ふ。高尚なる哲學的理念でも駄目であると同時に卑賤低級でもならない。高く低く廣くて狭いが如し融通無疑此處に圓融の法門の意義があるのだ。

生かせ宗學を圓融に。先ず第一に宗祖大聖人の一代記を法華經の活體驗として心に生かして感謝し、同時に御遺文等の文々をわが心に植えて、人を説く所に此處に活ける宗教としての力が涌出するのだ。

五、宗教家の修行

宗教家たるものは、先ず宗教的體現が必要だ。當家の實踐門は三秘即一秘、單信唱題の實踐的行を以つて理檀建立にまで進んでゐるが私はこゝを二往に考ふべきであらうと思ふ。即ち單信唱題は有智無智を嫌はずなすべき實踐行である。如何に智慧はなくとも信を持つてすれば佛智に入ると云ふ以信代慧の法門は法華經の全的法門であるが、此處に吾等宗教家として考ふべきものがある。それは法華經教義の台當比較に於て台家の迹勝本劣に對して、本宗は本勝迹劣なれども、これ一往論にして再往は本迹一致である所、本覺法門は單本覺にあらずして始覺即本覺である。この意味を考ふる時、單信唱題は實踐門の全部であるが宗教家には指導的役目が課せられてあ

る。現代人は生活の不安が如何にしてのぞかれるか。其處には精神的に物質的に不安除去の要求は千差である此處に法の運用法があるのだと思ふ。即ち社會人心の惱める思想生活の底をついて導くだけの教義の力を具体的に平易に生かして布教せねばならぬと思ふ。高尚なる哲學的理念でも駄目であると同時に卑賤低級でもならない。高く低く廣くて狭いが如し融通無疑此處に圓融の法門の意義があるのだ。

る。其處に讀誦助行は宗教家には正行として課せられねばならぬと思ふ。本門佛立講などの信仰的動機は宗祖精神の生悟りの誤謬であると思ふ。故に五種法師の行の中受持を以て正行となし讀誦以下は助行としてゐるがこれも一往論で再往は五種一致してゐる所に宗教家の眞價が生ずると思ふ。天台の理法門に對して、事法門を唱導せられたる所以は天台本覺法門の上に於ける車檀二流、所謂雜亂天台となつたこの点に日蓮上人の題目宗教の發案あるのであると思ふ。源信が天台僧で念佛を唱へた理法門の人間實生活に於ける不滿があつたのである。一念三千の妙法の理的超過の事法門、此處に理事相即せるが故に高く低く圓融の法門となつたのである。法華經は日蓮上人の一代の苦難によつて生きたのである。この意義等

遺文引照すれば、いくらかあると思ふが學者よく研究して證明づけて頂きたい。事法門此處に生きたる日蓮上人の宗教を見るのである。吾等の修行は形聲二益、十分ならしめる行であらねばならないと思ふ。日蓮上人の活動

的精神を身と心の上に時代と共に伸ばし活かして行く修行が必要であると信する次第である。日蓮上人は六百五十餘年前現有滅ありと雖ども不滅にして永遠に生きるのである。日蓮上人と共に生きやう。此處に生きた吾等の修行はつとけられるのである。

六、日蓮上人は生きてゐる

日蓮上人は生きてゐる。生きて在しますが故に給仕申上げる。吾宗の本尊論は相當に難解にして論議さるゝ所であるが、私は信仰的觀念の下に學究的ならず信眼を開いて解釋して見やう。

一言にすれば久遠無始無終の本佛である。一念三千觀の事法門を開顯すれば宇宙絶對本佛統一本尊である。日蓮宗には色々の本尊があつて本尊に迷ふ。蛇の頭も猫の足も、神になつて困ると云ふ。これは迷ふから迷ふので迷はなければ迷はない。事法門と開會の宗教と云ふ事を信得すれば必ず統一出来るのである。又日本國と日蓮上人の關係に於ても法華經こそ日本國の開顯の宗教である

のだ。日本國の宗教は法華經に統一さるべきであること日本國の姿、即ち法華經の姿であるからである。これを知るには法華經による開眼をすれば本尊統一され、國体

の如何に尊嚴さが解るのであらうと思ふが暑熱わが貧寺の居室にもせまる腦裡雜然たり。更に思索の秋に項を改めて整理して大方諸賢の指導を仰ぐ事にする。

外 道 の 書

—— 讀 書 餘 談 ——

塚 本 龍 晟

世は、世界史的局面に追込まれ、何處の國と雖も自國の將來に就て無關心で居られなくなつた。總動員法の全面的發動下にある我國の國民のうちで、燈下に新しい書物の匂ひを嗅ぎ、月の光、虫の音を、見聞きすることの出来る少數のわれ／＼は眞に撰ばれたるものと誇り得るであらう。よし又撰ばれたるものでないにしても、かゝる時間を持ち得る我が國のゆとりを感謝せずには居られない。

近頃、總動員体制下で紙の節約が強制され、雜誌、新聞等定期刊行物は紙質を悪くするとか、減頁するとか努力してゐるかの如く見えるのに、書籍に至つては、その出版の統計は恐るべし、一時間に一冊半の割合で生産されてゐるさうである。全く驚異に價する現象である。而もこのとてもない新刊書が讀まれてゐるのであるから頼もしいといふより恐ろしい氣がする。前に述べた私の言葉などこゝに於ては全く素朴な感傷にしか思はれない